

審査概要

「王舎城の悲劇にみる真宗救済論」の論究主題は論者が「親鸞の救済論の構造は煩惱具足の凡夫が凡夫であるままに如来の衆生救済の本願に出遇うことによって、苦悩の現実を生きながら絶望の闇を破り真の仏弟子として立ち上がっていくことを明らかにするものであること」（7頁）と述べるように、救済の具体性についての考察である。論者によればこのような煩惱具足の凡夫、就中、救われがたきものが救われていく救いを親鸞は「横超」として明らかにしたと述べる。そのような親鸞の救済観、つまり真宗救済論は現実社会において惹起した「王舎城の悲劇」を通して具体的に明らかにされていると考え、「王舎城の悲劇」を説く『涅槃経』、『観無量寿経』を通して、救われがたきものが救われていく宗教的救済の構造を論究するものである。

またそういう問題を「王舎城の悲劇」に設定したのは、論者が「序章」で現代社会を概観しながら「人間社会における加害者、被害者、強者、弱者という立場を超えて人間が救われるという、宗教的救済の構造を究明」したいという問題関心からである。それではそういう問題関心と問題設定が論文として論究されているかどうかという観点から本論文の論評を試みたい。

先ず第一章においては『涅槃経』の救済の論理が尋ねられている。なぜ『涅槃経』かについては、この『涅槃経』が釈迦入滅前後から小乗、大乘の仏教思想をへて、最終的には浄土教にまで影響を与えた壮大な思想大系であり、特に『大乘涅槃経』における阿闍世の廻心については、真宗救済論を考察するに際して決定的に重要な根拠を与えるからである。従って、『涅槃経』における「如来常住」「悉有仏性」「一闍提成仏」をとらえ、その中で『大乘涅槃経』において「如来の普遍性、永遠性が説かれていると述べて、第一章第四項において「唯除一闍提」を課題にして、結論として『大乘涅槃経』においては「善根を生ずる理由を衆生の側ではなく、如来の側から展開したのである」と述べて、そこに一闍提という救われがたきものが救われていく救済論理が明らかにされていると確認している。ここにおける論究は、この救済の論理がやがて法然、親鸞へと展開していく他力思想、横超思想の根拠を明示するものとして大事な結論と言える。つまり論者の第一章の論究意図はこの結論であったと見ていい。

しかし問題としては第一章が『涅槃経』の思想史的考察にとどまり、より具体的に『涅槃経』において阿闍世がどのように救われていくかの論究に工夫を凝らすべきであったと思われる。

次に第二章として『観無量寿経』を通して同じく救われがたきものが救われていく宗教的救済の構造が論究される。当然のごとく、論者もまた『観無量寿経』解釈の歴史の変遷に触れながら、いわゆる聖道諸師の学説を確認し、それらをドラステックに古今楷定した善導によって明らかにされた韋提希の救いについて論究する。特にその第二項第二節「善導独明仏正意」には「諸師の観法観と善導の観法観」と題して十六観法の内の第七華座観、

第八像観、第九真身観を取り上げて、諸師と善導の解釈の違いを依拠する經典の違いであることを述べる。つまり諸師は『観無量寿経』を大乘經典の所説との関わりにおいて解釈しているのに対して、善導はどこまでも浄土三部経との関わりを中心にして『観無量寿経』を解釈している点を捉えて明らかにする。この論究はやがて第三章において本願の仏道を明らかにする真宗救済論に繋がる伏線であると考えられる。構成としては評価できる。

更に第三項においては諸師と善導との九品観の相違を通して、善導の九品観理解が述べられている。これもまた善導の『観無量寿経』解釈によって、親鸞における救済論の内実を問うものであろう。これらの読み方は従来、真宗学においては既に論究されてきたものであり、それが特に論者の独自の見解でないのは言うまでもない。それらの一連の了解を通して、救われがたきものの救いを明確にする歴史的展開として位置づけて、第三章に繋げていく展開であるけれども、聖道諸師を語る場合には代表としては慧遠・吉蔵・智顛であるが、本論文にはそれらの違い及び智顛についての明確な論究が見られない。善導の独自性を出すためにも必要なのではないか。

以上の確認を経て、論者は、第三章として「真宗における救済論の具体性」について論究する。この章における主題は阿闍世と韋提希、いうなれば加害者と被害者の両側が救済されることにおいて真宗の救済が具体的に現されることとなるのである。しかしその辺りの問題を論者は明確にしないままに展開されているので、必ずしも主題の意図が露出されていないのが問題として指摘することができる。

真宗における救済論の中心軸として第十八願と及びその成就文に記された唯除の文は避けて通ることのできない問題である。これについて論者は特に、『教行信証』信巻の三心一心問答においては唯除の文を含んだ本願文をもって展開されているのに対して、信一念釈以降においては唯除の文を含まない本願文が引用されていることに注目している。唯除の文が含まれていないのはそれが問題となされていないというのではなく、むしろ、そこに引用されている「難治の機」を問題にした『涅槃経』と深く関わる問題として確認した上で、「唯除」の救いの過程として具体的に示されているものこそが「信巻」における『大乘涅槃経』の引用の阿闍世の獲信の姿である」（164頁）と述べて、以下論者が問題提起する所の真宗救済論の立場から「王舎城の悲劇」を論究して、それがそのまま親鸞の阿闍世観として展開しているとす。しかしその展開は「信巻」の解説のようであり、問題を鮮明にするためには、信心仏性説や、悪人往生への論究も必要ではないか。

論者の論究は阿闍世の廻心を通して本願文の「唯除五逆誹謗正法」の意義を明確にするのであるとの考察である。一方、韋提希については「如来の本願力と凡夫の往生 - 韋提希の念仏往生の過程から - 」と題して論究されるが、当然に韋提希の救済を問題にするのであるから『観無量寿経』をどのように理解するかという意味では、善導の解釈によりながら論者が善導の三心釈を取り上げていく手順は充当であろう。

そして論者は善導が『大無量寿経』に説かれた弥陀の本願を根拠にして、実業の凡夫たる韋提希の救済を明らかにしていることから、救われがたきものが救われていく救済の構造

を善導の『大無量寿経』抑止文解釈にもとめて、最後に韋提希の救済について「単に個人的な存在としてでもなく、むしろあらゆる凡夫に通じていく普遍的な意義をもっている」（231頁）と」と押さえ、その視点を継承するものとして念仏往生をもってする親鸞の韋提希観へと論究している。以上のように、いわゆる「王舎城の悲劇」を通して阿闍世と韋提希がいかにして見失われた人間性を取り戻していくかという真宗の救済観を論究してきたのであるが、最後に、そういう救われがたきものが救われていく根拠を親鸞によって明らかにされた「横超」の論理を明示して、本論文の課題的テーマの論究を進めていくのである。

それがこの最終節の第二節「人間業を超える救い」は本論文の主題的テーマを論究する箇所でありながら、従来の説を超えるものではなく、独自性が見られないのが残念である。おそらくは「横超」の説明に終始するあまり、親鸞の「横超」論のダイナミックな内実が出し切れていない嫌いがする。結章における本論文執筆の動機と問題意識は今後ともに展開していく大事な問題であろう。しかし論題が「王舎城の悲劇」であるから、これを中心にして阿闍世、韋提希の救いの相互の関係性と、この物語の持つ意味を結論として論述することが望ましいと思われる。

なお、一部、引用の示し方等に問題があるが、全体としては、着眼点と真宗救済論の中心をよく理解していると思われるので博士論文として「可」と判定する。